

広がる現代の寺子屋



夏休み編①

夏休みは、ふだん出来ないことを体験できるチャンスです。家でも学校でもない場所で、どんなことが出来るかな。まず現代の「寺子屋」を訪ねました。(佐々波幸子)

日曜日の午前中、岐阜県各務原市の高田浩史さん(37)宅。11人の小学生が感想文を書いていた。物語の「とべないホタル」を読んだ大田史哉くん(7)は「とべなくなったらとるがかわいそうでした」と書いて高田さんに見せた。

「その後、どう思った？」
「ほかのホタルが弱ったホタルを助けるところが、すごかった」

「じゃあ、それも書いてこか」と高田さん。史哉くんは書き終えると大きな花丸をもらった。

高田さんが主宰する「生きる力をつける学びの教室 文開分」。史哉くんは4月から通い始めた。初めは「オレ、アホやから」と算数のドリルもやろうとしなかった。

高田さんは「逃げてたら大人にな

「勉強めっちゃ楽しい」 料理・工作…遊びも満載

っても出来ないままだよ」と真剣に怒った。史哉くんは少しずつ机に向かうようになった。いま、読み終えた本は10冊になる。

1時間半勉強したあとは遊びの時間。甘えてくる子は高田さんがおんぶしたり、ひざに乗せたり。坂本愛さん(8)は「虫がついとる」「チクチクする」と言いながら、庭のミニトマトやキュウリをもいだ。

高田さんは愛知県庁で6年間、環境施策に携わったあと、大学に入り直して高校教師に。だが、体調を崩して退職した。「まわり道をして、出来ない子の気持ち分かるようになった。勉強だけじゃなく、あいさつやお手伝いも大事」と痛感した。

夏休みは授業だけでなく、けん玉や料理、工作にも力を入れる。市川輝輝君(12)は「ここは塾ってわけでもないし、遊びってわけでもない。めっちゃ勉強が楽しくて、あつという間に時間がすぎるんだ」。

2003年、神奈川県鎌倉市に誕生したNPO法人「鎌倉てらこや」。早稲田大などの大学生や青年会議所、地域の人が運営し、宗派を問わ

ず、寺や神社、教会が協力する。毎週土曜、2時間学び3時間本気で遊ぶ。水風船投げでズブぬれになった横浜国大生、佐々木まりあさん(19)は「子どもが素のままかかわってくれるのがうれしい」と笑う。小学校の先生になるのが目標だ。

「てらこや」の活動を、事務局長の上江洲慎さん(27)は「かつて地域にあった、年上のお兄ちゃんやお姉ちゃんとの群れ遊びを再興したものだ」と説明する。

最大のイベントは、建長寺での夏合宿。座禅を組み、精進料理を残さずいただく。子どもらが毎年アイデアを出し「宝探し」「屋台」などの企画を練る。参加する子は約70人、大学生は約50人という大所帯だ。

昨年参加した松嶋太郎君(9)は夜こっそり、友だちと寺の中を歩き回ったのが忘れられない。「隠れてやるのが楽しい。ことしも行く」
学生スタッフが親も交え、6月から準備を重ねる。息子2人が参加する円城寺裕紀子さん(41)はいう。「親はつい先回りしてお職立てしがちだけれど、学生さんは子どもから動き出すのを待っていてくれる」

現在、鎌倉を中心に北海道から沖縄まで19の「てらこや」がネットワークをつくり、交流を進めている。

この夏、愛知・豊田の「てらこや」は廃校での合宿を計画中。新潟・燕三条は休耕田で「泥リンピック」。大阪・泉大津では映画「プタがいた教室」の上映と講演会を開く。各地の連絡先は「てらこやネットワーク」のHd (<http://terakoya-netw.ork.com/teramap.html>) P。

◇ 次回12日の「夏休み」編は「廃校に泊まる」です。